平成 17 年 1 月の解説（府県天気予報）

【1 月の天候状況】

1 月の平均気温は全国的に平年並でした。中旬までは、気圧の谷の通過後に強い寒気の流入があり、全国的に気温が平年を下回る日が多くなりました。15 日から 16 日にかけては、本州の南岸を低気圧が発達しながら通過して、関東甲信地方から東北地方の太平洋側を中心に大雨や大雪となりました。その後は、短い周期で低気圧が日本付近を通るようになり、冬型の気圧配置も長続きしなかったため、全国的に気温が平年を上回る日が多くなりました。月末には、再び強い寒気が流入して、全国的に気温が平年を大きく下回りました。

月降水量は、北日本と東日本では平年より多く、関東甲信地方は平年の 174%となりましたが、西日本と南西諸島では平年より少ない地方が多く、四国地方は平年の 40%でした。

【1 月の検証結果】

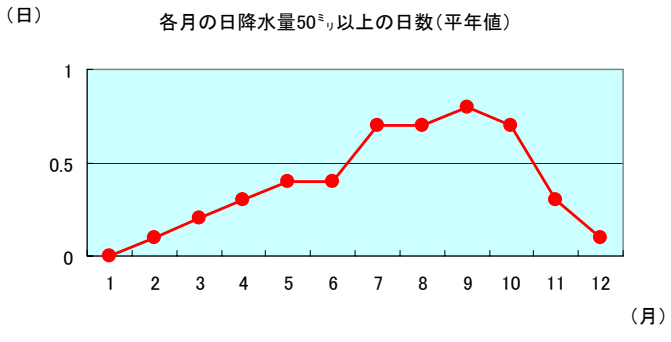
17 時発表予報の「降水の有無」の全国平均の適中率は、明日予報と明後日予報とも例年(注)より 1 ポイント低い 81%と 78%でした。明日予報と明後日予報とも、適中率に地域による偏りが目立ち、北日本などで例年よりやや高いものの、逆に西日本などでは例年よりやや低くなりました。

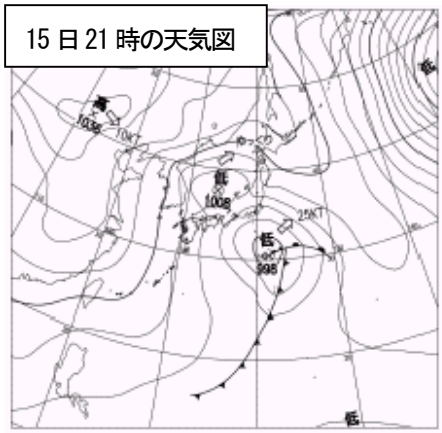
最高気温の予報誤差は、ほぼ全国的に例年より小さく、全国平均でも例年より 0.2℃小さい 1.4℃でした。最低気温の予報誤差は、例年並の 1.6℃でした。

(注) 例年値は気象庁ＨＰ（評価）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【1 月の天気予報から】――冬の大雨（15～16 日の東京地方の予報から）――

12 月から 1 月にかけては、冬型の気圧配置の日が多く、本州の南岸を低気圧が東進する場合でも陸地から離れて通過することが多いため、1971～2000 年の資料によると、この頃に東京で日降水量 50 ㍉以上を観測したのは 30 年間で 4 日しかありません。

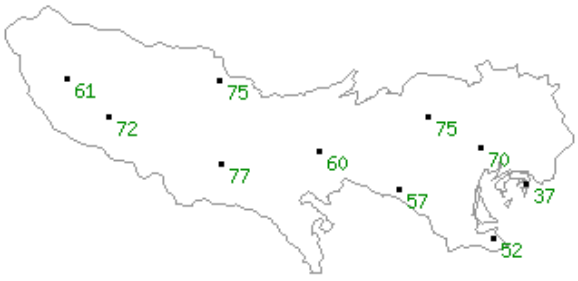




14日17時発表の東京地方の予報に際し、翌15日は低気圧が本州の南海上を発達しながら北東進し、15日21時には八丈島付近で中心気圧が996hPaまで深まるため、この時期としては珍しく、まとまった降水量になると予想しました。

15日から16日にかけての実況でも、ほぼ予想したとおりに関東沖で低気圧が急発達し、東京地方のほとんどの観測所で降水量の合計が50㍉を越しました。地上気温の低かった多摩西部では、最大13㌢の積雪の確認された所があり、青梅での2日間の合計降水量は75㍉に達しました。低気

圧の中心に近かった大手町では、15日朝から16日夕方までに合計69.5ﾐﾘの雨が降り、特に15日17時から16日17時までの24時間に観測した降水量（61.5ﾐﾘ）は1月としては1971年以降で第2位の記録となりました。



15 日～16 日の総降水量（東京地方：単位ﾐﾘ）

【3 月の天気予報の利用にあたって】

3 月も下旬になると東京や西日本などで桜が開花するようになりますが、昔から「花に嵐」の喩えがあるように、この頃は日本付近で低気圧が発達して広い範囲で強い風の吹くことがあります。

一方、この時期に野山に生えている草木のほとんどはまだ冬の乾燥状態にあるため、一旦山林火災が発生すれば大きな被害が出やすいので、注意が必要です。

最近の例としては、平成 14 年 3 月 21 日に全国的な強風が吹き荒れた際に、長野県や千葉県で大規模な山火事がありました。

この時期で強い風が予想される日には、特に念入りな火の管理を心掛けてください。